

ポスター | 全般的なケア

■ 2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 ■ ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:00 ~ 9:08

[28-P-A001-01]

「看取り期」から「生活期」への転換  
～「その日を待つ人ではなく、今日を生きる人へ」～

沖縄県 ○潮平 園子, 川上 朋美 (介護老人保健施設はまゆう)

9:08 ~ 9:16

[28-P-A001-02]

朝活 (朝のリハビリ) の実践  
朝に卓上リハビリを行い、利用者のQOL向上等を図る

福井県 ○畑木 参夫, 重田 真克, 山下 恵子, 富岡 真由美 (介護老人保健施設アクール若狭)

9:16 ~ 9:24

[28-P-A001-03]

リエイブルメントに基づく自立支援の実践  
～要介護度、ADL・QOLの改善～

山口県 ○嶋田 直美 (介護老人保健施設しまた川苑)

9:24 ~ 9:32

[28-P-A001-04]

家族のニーズを把握し、多職種協働での取り組み

福岡県 ○福田 素之 (介護老人保健施設 博慈苑)

9:32 ~ 9:40

[28-P-A001-05]

音楽を通じたコミュニティ形成と意味ある場所の創出

静岡県 ○中山 裕規 (介護老人保健施設 平安の森)

9:40 ~ 9:48

[28-P-A001-06]

転倒予防のトレーニングを試みて

山口県 ○野村 知子, 末永 幸恵, 齋藤 勝之, 宇野 裕美 (介護老人保健施設福寿苑)

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 血 ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:00 ~ 9:08

**[28-P-A001-01] 「看取り期」から「生活期」への転換  
～「その日を待つ人ではなく、今日を生きる人へ」～**

沖縄県 ○潮平 園子, 川上 朋美 (介護老人保健施設はまゆう)

**施設紹介**

当施設は、沖縄県の南部、豊見城市にあり、東シナ海や慶良間諸島を望む自然豊かな環境にあります。1階のホール外には園庭が広がり、穏やかに過ごせる環境が整っています。

「はまゆう」は医療法人おもと会が運営する70床の介護老人保健施設であり、同法人の病院をはじめとする医療・福祉施設と密接に連携し、地域包括ケアの一翼を担っています。当施設は病院・老健・特養が同一建物内に合築された日本初の複合施設で、医療・介護・福祉の多機能な支援体制を活かしたケアを提供しています。

**はじめに**

令和6年度に、介護・医療・障害福祉のトリプル改定が行われ、老健施設の役割が再確認されました。看取り加算やACP体制の整備が進み、「本人の尊厳ある最期を支えるケア」が重視されています。

高齢者は体調急変から看取りへ移行することもあります。なかには回復の可能性をもつ方もいます。

本事例は、誤嚥性肺炎後に看取り目的で当施設へ入所した101歳女性が、食支援と環境調整、多職種ケアにより活力を取り戻し、看取りから生活支援へと方向が変化した経過を通じ、柔軟なケア判断と「生きる力」に寄り添う事の重要性について再認識できたので報告します。

**事例紹介****入所時の状態**

101歳 女性 要介護4 6年前に有料老人ホームへ入居され、誤嚥性肺炎で入院となり当施設へ看取り目的で入所(2024年10月22日) ACP実施済(蘇生、延命治療を望まず、経口摂取中心希望) 排泄全介助 常時オムツ。入浴、ストレッチャーにて全介助。食事は全介助で対応。病院の指示によりリクライニング車椅子15度・右側臥位にて摂取。摂取量は0-3割。体重(36.7kg) BMI(14.7) 傾眠著明、発語少なく反応鈍い。左下腿に褥瘡あり、エアマット使用。肺雑あり、湿性咳嗽、自己喀痰困難、吸引必要。

**各部署の関わりとケア内容****【看護】**

- SPO2測定・呼吸観察、吸引対応
- 右側臥位で呼吸安楽促進
- 苦痛時は介入最小限にとどめ安楽優先
- 皮膚脆弱(スライディングシート使用)
- 栄養状態の確認、3ヶ月ごとの血液検査

**【介護】**

- 毎食時に離床し、景色の良い場所で食事支援

- 体幹や顎の角度など食事姿勢を調整
- 手添え介助で徐々に自力摂取を促す
- 自助皿や自助具などを活用、拒否時は時間をおいて促す
- 他利用者との交流を意識し、コミュニケーション機会を創出

【栄養】

- 栄養補助食品・形態や嗜好配慮
- 摂取量状況に応じて提供カロリーを調整
- 定期的な栄養モニタリングの実施
- 【リハビリ（PT・ST）】
- STによる摂食嚥下評価と食事介助指導
- PTによる体位調整、排痰促進のためのポジショニングと覚醒促進支援

【支援相談員】

- 家族とのACP共有、経過報告
- 方針の変化に応じた説明と調整

【施設ケアマネジャー】

- ACPに基づいたケアプラン作成
- 多職種連携による方針変更（看取り⇒生活支援）

経過と変化のまとめ

【10月】入所時

- 状態：spo2（86～93%）呼吸状態不安定。肺雑音あり、エア入り弱い。覚醒困難、苦痛表情あり。内服不可、経口摂取困難（拒否やムセあり）
- ケア内容：吸引実施、右側臥位にてspo2改善。時間をおいて介助する事で数口の摂取がみられる。
- 変化：一時的に覚醒し、開眼することもあるが継続困難。摂取不安定。

【11月～12月】状態低下

- 状態：摂取量さらに低下。食渣の吸引あり。嚥下リスク高まる。
- ケア内容：主食中止。副食ハーフ食へ変更（760Kcal⇒360Kcal）言語聴覚士より嚥下評価受け一口量やタイミングを工夫。
- 変化：夕食時に自発的に茶碗を持つ姿みられる。食事への関心が一部回復。

【1月】食意欲の兆し

- 状態：「ご飯が食べたい」と訴えるなど食意欲が一時的に向上。自力摂取も見られる。ミキサー粥拒否、アチビーを好む傾向。
- ケア内容：好みに合わせた食事提供へ変更。痰の増加に注意しつつ、摂取状況を観察。
- 変化：1月下旬より主食（アチビー90g）を安定して摂取。摂取量徐々に増加。

【2月～3月】回復期

- 状態：食事は自力摂取で全量摂取可能に。副食好みはあるが概ね良好。水分摂取は拒否。
- ケア内容：自力摂取できるよう姿勢調整、食器のセッティングを実施。水分は声かけ促しで対応。栄養補助食品の促し。
- 変化：経口摂取安定し、吸引の回数も減少。日中の活動量や覚醒時間も改善傾向。

【4月～現在】安定・回復維持期

- 状態：体重増加 体重(40.0kg) BMI (16.0)、血液検査結果良好。褥瘡なし、吸引不要。
- ケア内容：好みや食意欲に合わせた食事支援継続。
- 変化：発語、会話が增多、過去の生活についても語るなど精神・認知面で大きく改善。生活意欲の回復が明確にみられている。

考察

本事例は看取り期とされた101歳の入所者が食事支援や日常的な関わり、環境の工夫を通じて活力を取り戻し、生活支援へのケアの方向性が転換されたものである。超高齢であっても、人は関わり方や環境次第で回復の可能性を持つことが示された。特に食事量の増加や生活の質の向上は、姿勢調整や離床の促し、こまめな声かけといった日々の小さな支援が積み重なった結果

であり、これらの変化にいち早く気づき対応できたのは、多職種が連携して入所者を見守り続けてきたからである。また、看取り期というケア方針にとらわれず、目の前の状態を柔軟に評価し、見直す視点を持てたことが本人の潜在的な回復力を引き出すことに繋がった。本事例を通して看取りケアにおいても「命の長さ」ではなく「暮らしの質」に焦点をあてた支援が重要であることが改めて認識された。今後も超高齢であっても、その人らしい生活を大切に、チームで連携したケアを提供していきたい。

#### 課題・まとめ

状態改善は職員の支援の成果であり、非常に喜ばしいが、看取り目的での入所であったため、元気になったことで「次の生活の場」の調整という新たな課題が生じている。ご家族にとっては、安堵と同時に戸惑いもあり、今後はご本人の状態に応じた継続的な生活環境の調整が必要である。

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:08 ~ 9:16

**[28-P-A001-02] 朝活 (朝のリハビリ) の実践**

朝に卓上リハビリを行い、利用者のQOL向上等を図る

福井県 ○畑木 参夫, 重田 真克, 山下 恵子, 富岡 真由美 (介護老人保健施設アクール若狭)

**【はじめに】**

アクール若狭は、超強化型介護老人保健施設として、利用者の在宅復帰を目指して計画的にリハビリサービス等を提供している。今回、起床後朝食までの時間に着目し、新たなリハビリサービスを提供できないか検討した。朝早く起きて活動する朝活には、生活リズムを整え、気持ちが前向きになるなどの効果が期待できる。現状、利用者は起床後朝食まで食堂で過ごす方が多く、食堂ではテレビを見たり、他の利用者と話をしたりしている。また塗り絵や計算問題に取り組んでいる方もいるが、席で眠たそうにされている方もいる。職員は限られた人数で離床介助を行っているため、起床された利用者に関わる十分な時間を確保することが難しい状況である。そこで、職員の業務負担を極力増やさず、朝食までの時間に利用者が食堂で安全に行えることがないかを考え、席に座って取り組める卓上リハビリ (手指のリハビリ等) を実施することとした。

**【目的】**

起床後、朝食までの時間を活用し、卓上リハビリに取り組むことで、利用者の握力や巧緻性の向上、施設生活におけるQOLの向上につなげたい。

**【方法】****1. 対象者の選定**

- ・限られた人数で離床介助を行っているため、職員の負担を増やさないよう声かけなど軽介助でリハビリが行える利用者を選定する。
- ・リハビリ意欲のある利用者を選定する。
- ・リハビリ効果を評価するため、退所予定のない利用者を選定する。

以上の内容を踏まえ、8名の利用者を選定した。

**2. リハビリ内容の検討**

- ・食堂の席に座って安全にできる。
  - ・簡単で覚えやすい。
  - ・朝なので体操の要素も含んだリハビリを入れる。
- 以上の内容を踏まえて作業療法士と相談し、以下3種類のリハビリを実施することとした。

(1) タオル体操 (約3分)

(2) ボール・クリップ・スポンジを握る訓練 (約2分)

(3) 箸の切れ端を掴んでペットボトルの中へ入れる訓練 (約2分)

**3. 朝食前に食堂にて卓上リハビリを実施**

- ・職員の負担を増やさず、安全に行えるよう実施日時や役割分担を決め、約2ヶ月間リハビリを実施した。
- ・当初、卓上リハビリ対象者を8名として、リハビリを開始したが、他の利用者からもリハビリ希望があったため、対象者を拡大し、最終的には21名の方が卓上リハビリに取り組まれた。
- ・リハビリ内容に飽きてしまった方には、新しい卓上リハビリメニュー (「おはじき」を容器に押し込むリハビリ) を提案し、再度リハビリに取り組んでいただくことができた。

#### 4. 評価

##### (1) 握力・巧緻性の変化について

リハビリ参加者21名の内、1ヶ月以上継続してリハビリに取り組めた10名の利用者について、リハビリ開始前と終了後に、握力測定・ペグ裏返し時間の測定を行い、変化を調べた。

(2) 卓上リハビリ実施後、今回の取組みについて利用者アンケート（聞き取り）を実施した。

##### 【結果】

・握力については、測定数値が向上した方と低下した方がみられた。巧緻性については、測定数値が向上した方が多くみられた。

・卓上リハビリに消極的な方もいたが、利用者アンケートでは半数以上の方が卓上リハビリを続けていきたいと答えており、利用者のリハビリ意欲が高いことが分かった。

・リハビリ道具を渡すと集中して卓上リハビリに取り組む方が多かった。

・卓上リハビリの方法を忘れてしまう利用者には、他の利用者が方法を伝えながら一緒に卓上リハビリを行うなどの交流もみられた。

・「ボール下さい」「今日はリハビリせんのか？」など利用者から卓上リハビリを催促されることもあった。

・起床時、利用者対応（体調不良や排泄介助等）のため、卓上リハビリを実施できないこともあった。

・利用者から要望があり、朝以外の時間に卓上リハビリを行うこともあった。

##### 【まとめ】

・朝食までの時間にリハビリの機会を提供できたことで、リハビリ意欲のある方に喜んでいただきQOL向上につながった。

・握力、巧緻性については、能力が向上した方と低下した方がおり、効果が分かりづらかった。（卓上リハビリを行う時間は確実に増加しており、握力や巧緻性の向上に寄与していると思われる）

・リハビリメニューが限られており、内容に飽きてしまう利用者もいたため、リハビリメニューを増やすとより効果が期待できる。

・朝食前は、その日の状況によってリハビリができない日があったことや朝以外の時間にリハビリ希望があったことを踏まえて、今後は朝食前に限らず、昼食前、夕食前、日中など隙間時間を有効活用して卓上リハビリを継続する。

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 血 ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:16 ~ 9:24

**[28-P-A001-03] リエイブルメントに基づく自立支援の実践**

～要介護度、ADL・QOLの改善～

山口県 ○嶋田 直美 (介護老人保健施設しまた川苑)

**【はじめに】**

当苑では、国際医療福祉大学大学院で開発された「自立支援介護学」の理念に基づき、科学的介護を実践している。このアプローチは、入所者様が尊厳を持って自立した生活を送ることを最優先に考え、個々人の持つ本来の能力を最大限に引き出すことを目的とするものである。特に「リエイブルメント」の視点を通してリハビリテーションを実践し、ADL（日常生活動作）やQOL（生活の質）の改善が得られた症例について報告する。

**【症例紹介】**

対象者は、要介護度4、75歳女性のA様。第4・5腰椎変性すべり症術後で、令和6年2月より当通所リハビリ週2回、訪問リハビリ週1回にて利用開始。利用開始時はBarthel Index (BI) が45点であり、移乗・トイレ動作・更衣は一部介助、入浴は全介助、平地歩行・階段昇降は実施不可であり、端座位保持も不安定な状態だった。

**【介入方法】**

リハビリ専門職では、利用開始時は基本的動作の獲得を目標に筋力訓練や基本動作の反復練習、端座位・立位バランス練習、自主リハビリの提案、環境調整等を実施する。ADLの改善とともに本人の希望もIADLへ拡大し、立位バランス練習での運動負荷量の増大、歩行練習や階段昇降等を進め、活動量の増大や活動範囲の拡大化を図った。介護スタッフは、科学的介護の基本ケアである水分ケア、歩行ケアを提供し、本人の能力の引き出しを積極的に図った。

**【結果】**

現在のA様は要介護度2、BIは85点に改善している。移動は車椅子駆動自立、家事動作時は固定式歩行器使用。階段昇降は手すり使用にて見守り。入浴は自宅にて見守り～一部介助にて実施。毎日ご主人との外食もされており、QOLの改善も見られる。「来年の春にクルーズ船で旅行に行くからもっとしっかりと歩けるようになりたい」という具体的な目標を掲げ、リハビリテーションや様々な活動に意欲的に取り組まれている。

**【考察】**

A様のBIが45点から85点への大きな改善、要介護度4から2への改善は、当苑が実践する科学的介護、特にリエイブルメントの視点を取り入れたアプローチの有効性を示している。

リエイブルメントとは、「再びできるようになる」ことを意味し、「介護の前のリハビリテーション」を原則とする考え方である。高齢者が自立した在宅生活を継続するために、能力の回復・改善・維持を図ることを目指している。このサービスは、利用者自身の「自分で何かをしたい」という意思に基づいて、生活課題の解決とQOL向上を目的としたアセスメントを多職種協力のもとで行うことが特徴である。

当苑ではリハビリテーション会議を開催し、本人・家族を中心にリハビリ専門職、介護支援専門員、他サービス事業所担当者等の多職種協働にて、現在の状況、今後の具体的目標や環境調整等について連携を図り、遂行している。「面談中心」の支援を通じて、A様自身のセルフマネジメント力を引き出した「手を後ろに回したケア」の考え方が実践できたと考える。この面談を通じて、A様の「できること」に焦点を当て、達成感を積み重ねることで、自信と意欲が向上

し、日々の活動量が増加している。これはリエイブルメントが重視するウェルビーイングの追求にも繋がると考えられる。

科学的介護では基本的ケアである水分ケアや歩行ケアを実施することで、体調を整え、活動性の向上が得られた。また、「エイジズム（年齢に基づく偏見や差別）」を超えて、高齢者一人ひとりの個性と可能性、尊厳を最大限に尊重するものとして、A様の尊厳を尊重し、「できる」と信じて能力を最大限に引き出せたと考えられる。

今後の課題としては、リハビリテーション終了後の生活習慣や社会参加をどのようにサポートしていくかが重要と考える。リエイブルメントの理念やエイジズムの考え方など、介護を受ける側と提供する側の双方の意識改革の促進も必要である。特に、利用者が「介護されること」に慣れてしまうのではなく、「自立を取り戻す」ことへの意欲を持続できるよう、継続的な啓発と動機付けが重要である。また、地域社会で自立した生活を継続出来るよう、地域の生活支援コーディネーターやボランティア団体、既存の地域資源との連携を強化し、趣味活動や就労的活動を含む、多様な社会参加の場の提供や環境を整備することが大切と考える。

【おわりに】

本症例では、リエイブルメントが要介護高齢者の自立支援に有効であり、生活機能の改善と意欲向上に大きく貢献することを示した。今後も本人の意欲を最大限に引き出し、地域連携を深めることで、より多くの高齢者が「元の生活を取り戻し、自分らしく幸せな人生を送る」支援を推進していく。

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:24 ~ 9:32

**[28-P-A001-04] 家族のニーズを把握し、多職種協働での取り組み**

福岡県 ○福田 素之 (介護老人保健施設 博慈苑)

## 「家族のニーズを把握し、多職種協働での取り組み」

## 抄録本文【はじめに】

介護老人保健施設は、介護保険法では「施設サービス計画に基づいて、看護、医学的管理の下における介護及び機能訓練その他必要な医療並びに日常生活上の世話をを行うことを目的とする」と明記されている。施設サービス計画立案までのプロセスとして、「利用者・家族のニーズを把握する」が第1段階だが、認知症専門棟の入所者は本人の意向を聴取できないケースも少なくない。結果、本人のニーズの把握が難しく、スタッフ本位のケア・リハビリになる傾向に危機感を抱き、今回の取り組みに至った。その中で見えた本症例の変化と、今後の課題について報告する。

## 【症例】

〔A氏〕82歳/男性/要介護3/病名：認知症、アルコール依存症/既往歴：外傷性クモ膜下出血、統合失調症/障害自立度B2/認知症生活自立度：3A/B.I：15点/HDS-R：検査協力得られず測定不可

## 【経過】

第1期：入所～心身機能低下に至った期間

・X年Y月：当苑入所。車椅子自走可能。移乗は見守り～軽介助レベル。注意・判断力低下により一人で移乗し転倒することが度々みられる。声掛けに立腹して機能訓練にも消極的反応を示す事が多い。

・X年Y+6月頃～：体調不良等で臥床時間が増加し身体機能低下。さらに転倒リスクが上昇。転倒防止目的で入浴時及び食事時のみ離床となり、臥床時間が増加。

第2期：多職種とのやりとりからニーズ把握の必要性を改めて感じ、ニーズの把握に努めた期間

・X+1年Y+3月：車椅子座位保持能力低下。リクライニング車椅子への変更を看護師からOTに打診。

→OTより、原則標準型車椅子対応で、入浴等の離床時間が長い場合は臨機応変にリクライニング車椅子使用と伝達。

→看護師より、「臨機応変」とすると判断基準が曖昧となり、「常時」リクライニング車椅子使用になると指摘。

→「リハビリ職員からの視点」「療養棟職員からの視点」の相違あり。

→再度、本氏の現状を踏まえた上で、家族の意向の再聴取とニーズの把握が必要と考える。

→ケアマネ・看護師・OT同席のもと、家族と面談実施。ニーズとして以下の3点を把握。

a) リクライニング車椅子でも良いので、できるだけベッドから離れて生活してほしい。

b) 食事はできるだけ自分で食べてほしい。食事の時は標準型車椅子に座って自分で食べてほしい。

c) 車椅子に座る時だけでもしっかりと立って移るなど、身体機能をできるだけ維持してほしい。

第3期：多職種でケア方法を検討・実施した期間

・X+1年Y+4月～：上記の家族のニーズをもとに、本氏の耐久性を考慮した活動プランを検

討。午前中はリクライニング車椅子に離床して過ごし、食事は自力摂取。午後は夕食まで臥床して過ごし、夕食時は標準型車椅子での食事摂取とした。

・X+1年Y+5月～：活動プランの定着が図られ、本氏の座位耐久性も徐々に向上傾向を認めたため、昼食時のみ椅子に座り変えて摂取することとなった。

【取り組み後の変化点】

・精神状態が穏やかに経過している事が多く、発語量が増加。自身の要求を訴えられる頻度も増加傾向。

・リハビリ時の起立訓練への拒否は減少。身体機能訓練が可能となった。

・日によって斑はあるものの、移乗の際の協力動作がみられる頻度が増加。

・夕食時は標準型車椅子に離床して食事自力摂取し、滑落なく経過している。

【今後の課題】

今回、家族のニーズを把握し、多職種協働で活動プランを実施したことで上記の変化を認め、ADLの維持につながる結果となった。今回は利用者本人の直接的な意向の聞き取りが困難であった為、家族の意向をもとにニーズを把握したが、「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」の意思決定支援の基本原則には、「本人への支援は、本人の意思の尊重、つまり自己決定の尊重に基づき行う。」「意思決定支援者は、認知症の人の身振り手振り、表情の変化も意思表示として読み取る努力を最大限に行うことが求められる」とされている。入所者に関わる全ての職種が意思決定支援者という自覚を持ち、本人の意向を汲み取ることができるよう関わること、各々の職種の視点で本人の意思の尊重が図られるよう、利用者本人にとってどのような支援が必要か等のカンファレンスを重ね、当苑の理念にもある「利用者本位のサービスを提供し、自立を支援する」ことを達成できるよう、取り組みの際の役割分担の明確化、仕組み・流れを標準化する必要があると考える。

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:32 ~ 9:40

**[28-P-A001-05] 音楽を通じたコミュニティ形成と意味ある場所の創出**

静岡県 ○中山 裕規 (介護老人保健施設 平安の森)

## はじめに

介護老人保健施設では、身体機能の維持や安全確保が優先される一方で、生活の質 (QOL) や「その人らしい暮らし」を支援する取り組みは後回しにされやすいという課題がある。施設での生活は画一的になりやすく、利用者がどのように日々を楽しみ、生きがいを感じながら過ごしているのかという視点は軽視されがちである。筆者は日常業務の中で、「利用者は本当に自然に生活できているのか」「日々の中に楽しみにできる何かが存在しているのか」という疑問を抱き、音楽という活動に着目した。音楽は、言語や認知機能の状態に左右されにくく、誰もが感覚的・情緒的に受け止められる共通の体験を提供できる媒体である。加えて、過去の記憶や感情を呼び起こす力があることから、認知症高齢者においても情緒の安定や行動・心理症状 (BPSD) の緩和につながる事が報告されている (高田・岩永,2007)。音楽を媒介とする活動は、単なる娯楽に留まらず、利用者同士の交流を生み出し、関係性を構築する場にもなる。作業療法における「意味ある場所」の創出という視点からも意義があり、施設生活の質向上に向けた重要な介入と考えた。本研究では、音楽活動が入所者の関係性や生活に与える影響、その中で小さなコミュニティが形成される過程を明らかにすることを目的とした。

## 目的

音楽活動を通じた利用者間の交流や関係性の変化に注目し、小さなコミュニティが形成され、「意味ある場所」が創出されていく過程を明らかにすることを目的とした。

## 方法

介護老人保健施設に入所している15名の高齢者 (平均年齢87±17歳、要介護度2.4、HDS-R21±6点) を対象とした。2025年2月から6月までの4か月間、週2回・各30分の音楽活動を実施した。活動では昭和歌謡や童謡など利用者にとって馴染みのある楽曲4~5曲を選び、歌詞カードを用いながら参加型で進行した。活動中は表情や発話、参加姿勢、利用者同士の交流状況、活動中および前後の役割行動、小さな変化などを観察し、職員が詳細に記録した。活動外での交流や行動の変化についても併せて観察した。記録データは質的に分析し、音楽活動が利用者の関係性や生活に与える影響について検討した。

## 結果

活動を継続する中で、以下のような変化が確認された。1)音楽や活動に関する話題が利用者同士の間で自然に生まれた。2)活動のない日にも「次はいつ?」といった楽しみにする発言が見られた。3)活動の場が「みんなで集まり楽しむ場」として認識され、活動外での交流も活発になった。4)歌詞カードの準備や声かけなど、小さな役割を自発的に担う利用者が現れた。5)活動開始前に自然と集合する姿が定着した。6)活動を軸とした生活リズムの安定が見られる利用者もいた。7)歌詞やメロディーが過去の記憶を呼び起こし、自身の思い出話を語る場面も増えた。8)活動外でも「〇〇さんと一緒に歌った」と話題に出すなど、関係性の継続が確認できた。これらの変化は、利用者同士の関係性の構築、自信や役割意識の回復、小さなコミュニティの形成につながったと考えられる。

## 考察

音楽活動は、共通の体験を生み出すことで利用者同士の関係性を育むとともに、「誰かと関わ

ることの安心感」「人と共にいる心地よさ」を提供していた。活動の場が「安心して関われる場所」として認識されることで、作業療法における「意味ある場所」が創出されていたことが確認できた。音楽は情緒安定やBPSD緩和といった心理的効果だけでなく、生活リズムや役割行動にも好影響を及ぼしていた。とくに、音楽が過去の経験や記憶を呼び起こすことで利用者同士の会話が弾み、相手を「知っている人」として認識するきっかけになったことは、コミュニティ形成における重要な要素であると考えられる。また、活動を重ねる中で自発的に役割を担う姿や、活動自体を楽しみにする発言が増加したことから、音楽活動は「自分も参加できる」「役に立てる」という感覚、すなわち自己効力感を支える介入であったといえる。これらの結果は、高田・岩永（2007）の報告と一致し、音楽活動が認知症高齢者にも有効な心理・社会的介入となることが示唆された。

#### 今後の課題

本研究では観察記録に基づく分析が中心であったが、今後は関係図や活動参加意欲のスケール、QOL評価尺度などを用いた客観的かつ多面的な評価手法の導入が課題である。また、多職種連携による支援体制を整え、音楽活動を日常生活の一部として根づかせることも重要である。活動を「また参加したい」「仲間と関わりたい」という気持ちにつなげ、利用者自身が希望を持ち続けられるよう支援を継続する必要がある。さらに、活動で得られる達成感や充実感が新たな意欲を生み、次の作業へとつながるような関わりを重ねていくことが重要である。こうした作業の積み重ねが利用者の人生に意味や希望を見い出すきっかけとなり、新たな作業を生み出すきっかけとしていきたい。

#### 結論

音楽活動は認知症高齢者にも情緒の安定やBPSD緩和、自己効力感の向上、生活リズムの安定、コミュニティ形成など多面的な効果を示した。共通の体験を通じた小さなコミュニティが「意味ある場所」として機能していたことが確認され、音楽活動は作業療法的介入として有効であり補完代替医療としての可能性も示唆された。今後は体系的な評価と多職種連携のもと、音楽活動を施設生活に自然に根づく支援として定着させることが求められる。

#### 引用

老健における音楽療法に関する研究第18報～個別音楽療法で意思疎通が図れた脳幹出血後遺症の1例～日本補完代替医療学会誌 第11巻 第1号2014年3月:49:  
補完代替医療としての音楽療法が認知症に及ぼす効果

ポスター | 全般的なケア

2025年11月28日(金) 9:00 ~ 10:00 血 ポスター会場 (シーモール 5F フリースペース)

**[P-A001] 全般的なケア 1**

座長：浅井 真希 (老人保健施設愛泉館)

9:40 ~ 9:48

**[28-P-A001-06] 転倒予防のトレーニングを試みて**

山口県 ○野村 知子, 末永 幸恵, 齋藤 勝之, 宇野 裕美 (介護老人保健施設福寿苑)

転倒予防のトレーニングを試みて老人保健施設 福寿苑発表者 野村 知子 (介護福祉士)  
共同演者 末永 幸恵 (介護職)・齋藤 勝之 (看護職)・宇野 裕美 (介護職) 【目的】高  
齢になると転倒の発生率が高くなり、骨折や手術により後遺症を患うことも少なくない。利用者  
の多くは、認知症や下肢の筋力低下がみられ危険予知能力も低下しているため、センサー等を  
利用していても防ぎようのない転倒があるのも事実である。リハビリ以外は運動する機会が少  
ないことから、スタッフによる転倒予防のトレーニングを実施した結果を報告する。【研究方  
法】対象は、転倒転落アセスメントスコアシート危険度2の利用者5名。2024年6月から9月の4か  
月間。平日の午前中に計75回実施。データ収集方法および分析方法は、1.写真付き手順表の作成  
し、実施者は手順表に沿って実施する。2.トレーニング中の様子を個別記録表に記入し、利用者  
の状態を把握し参加の様子や発言を分析する。3.運動機能評価表を作成し月1回TUGと膝筋力測  
定を行い、データをグラフ化し分析する。TUGとは、Timed Up and Goの略で、歩行能力や動的  
バランス、敏捷性などを統合した機能的移動能力を評価するテストのことである。【倫理的配  
慮】対象者にはプライバシーと匿名性の保持、途中で研究参加を辞退してもその後の入所生活  
に影響がない事を説明し、研究参加への協力を依頼し同意を得た。【結果】A氏は参加中「皆と  
たいそうして良かった」との発言がきかれた。TUGは2回目に大きくタイムが短縮したが後半に  
変化はなかった。膝筋力測定は3回目まで順調に成果が見られ、後半はやや下がったが維持でき  
た。B氏はトレーニング初日に転倒し腰痛等でしばらく不参加が続いた。参加しても消極的な  
発言が多かったが、2か月目以降は「やっぱせにゃーいけん」と発言に変化が見られた。TUG、  
膝筋力測定ともに順調に成果が得られていたが、5回目は「調子が悪い」との発言もあり数値が  
さがった。C氏は「毎日の体操の時間が楽しい」との発言の通り積極的に参加された。TUGは  
順調に成果が得られた。膝筋力測定は後半「体調が悪いわけではないけど疲れやすい」との発  
言もあり数値が下がった。D氏、E氏については実施当初は意欲的に取り組んでいたが、途中  
から体調不良で不参加が続きその後入院加療のため退所となった。【考察】今回転倒予防のト  
レーニングをすることで、普段使わない筋肉や関節を動かす事ができ、椅子に座ったままできる  
ラジオ体操を加えることで全身の運動が行えた。また、スタッフを中心に輪になることで、一人  
一人の表情を見ながら動作の確認を行うことができた。また、小集団で行うことで身体面のみ  
ならず、精神面にも良い結果をもたらした。消極的で硬い表情だったが、運動の合間のやり取り  
を通し表情が和らぎ笑顔がみられるようになり、トレーニングに参加することで「何かがした  
い」という欲求が満たされ精神的に落ち着いた。しかし、皆高齢であることから体力面も考慮  
し無理なくトレーニングを継続することも大切だと感じた。【結論】加齢による筋力低下は避  
けることはできないが、トレーニングをすることで少しでも下肢筋力が維持され、転倒予防に  
つながるよう今後も継続していく。